

# 三功が環境シンポ

食品新聞  
2008年6月6日

「食の地域循環システム」を推進する三功(三重県津市、TEL059-222-5151)は、主催の環境シンポジウム「食の安全と環境の保全」が5月9日、名古屋国際センター別棟ホールで開催された(後援は農林水産省東海農政局、協力は中部環境パートナーシップオフィス、なご環境大学、中部興業種間リサイクルネットワーク、酵素の里)。同社は「循環型社会」の実現に向け、食品リサイクル法の施行に先立つ95年1月、生ゴミの堆肥化事業に着手した。08年12月から、地元の農業生産者らと共に、製造した生ゴミ堆肥で栽培した農作物を生ゴミの排出元である地元S.M.などで販売する「食品廃棄物のリサイクル・ループ」を構築。排出元から生ゴミを安定的に供給してもらい、それを循環させることに成功している。開催の趣旨は同システムを広く発信し、これからの食の安全と環境の保全に寄与すること。会場にはS.M.などの流通業者、農業生産者、食品廃棄物処理メーカーなど約50人が来場し、コメントターの報告やパネルディスカッションに耳を傾けた。

今回、特に注目されたのは、食品廃棄物(生ゴミ)と日本大学生物資源科学部が共同で行った生ゴミ堆肥を使用した農作物の三功が同家生ゴミ「腐熟態糞素」の含有量について研究発表。リサーチする植物資源科学科・作物学研究室の磯部勝孝准教授の発表要旨は次の通り。

今回、特に注目されたのは、食品廃棄物(生ゴミ)と日本大学生物資源科学部が共同で行った生ゴミ堆肥を使用した農作物の三功が同家生ゴミ「腐熟態糞素」の含有量について研究発表。リサーチする植物資源科学科・作物学研究室の磯部勝孝准教授の発表要旨は次の通り。

今回、特に注目されたのは、食品廃棄物(生ゴミ)と日本大学生物資源科学部が共同で行った生ゴミ堆肥を使用した農作物の三功が同家生ゴミ「腐熟態糞素」の含有量について研究発表。リサーチする植物資源科学科・作物学研究室の磯部勝孝准教授の発表要旨は次の通り。

## リサイクル・ループ構築を発信

### 生ゴミ堆肥の特性を研究発表

今回、特に注目されたのは、食品廃棄物(生ゴミ)と日本大学生物資源科学部が共同で行った生ゴミ堆肥を使用した農作物の三功が同家生ゴミ「腐熟態糞素」の含有量について研究発表。リサーチする植物資源科学科・作物学研究室の磯部勝孝准教授の発表要旨は次の通り。



今回の実験でも分かったように、生ゴミ堆肥を投入したからといって、化成肥料のように即効的な効果が現れるわけではない。メンバーループは収穫の前後に土壌分析を行って、生ゴミ堆肥の投入量を計り、時間をかけて土壌を育て上げていく。現在、直売所以外の4か所のS.M.メンバーの売場がある。売上げも順調であるという。地域での消費者の信頼を勝ち取った証ではないだろうか。

「土壌中の炭素、窒素、リンの割合が、炭素(C)に著しく高くなることはなかなか見られませんが、生ゴミ堆肥区においては緩やかに高まる傾向があり、畑が軟らかくなってきた。化成肥料の時の作業の手間が省けるようになった。収穫量が上がってきた。味が良くなった。病気が減った。」と准教授が話した。主な意見は「土壌水分が足りなくなった。化成肥料の時より作業の手間が省けるようになった。収穫量が上がってきた。味が良くなった。病気が減った。」と准教授が話した。

今回の実験でも分かったように、生ゴミ堆肥を投入したからといって、化成肥料のように即効的な効果が現れるわけではない。メンバーループは収穫の前後に土壌分析を行って、生ゴミ堆肥の投入量を計り、時間をかけて土壌を育て上げていく。現在、直売所以外の4か所のS.M.メンバーの売場がある。売上げも順調であるという。地域での消費者の信頼を勝ち取った証ではないだろうか。

今回の実験でも分かったように、生ゴミ堆肥を投入したからといって、化成肥料のように即効的な効果が現れるわけではない。メンバーループは収穫の前後に土壌分析を行って、生ゴミ堆肥の投入量を計り、時間をかけて土壌を育て上げていく。現在、直売所以外の4か所のS.M.メンバーの売場がある。売上げも順調であるという。地域での消費者の信頼を勝ち取った証ではないだろうか。